

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

ディケンズ作品の結び：未完の謎を追う

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2023-02-05 キーワード: 作成者: 坂本, 裕子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000825

ディケンズ作品の結び

—— 未完の謎を追う ——

坂 本 裕 子

キーワード

謎 アヘン窟 不在 指輪 変装

はじめに

19世紀イギリスを代表する小説家チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812-1870）の訃報は、当時の人々に大きな衝撃を与えた。同時代に活躍していたアメリカの詩人ロングフェロー（Henry Wadsworth Longfellow, 1807-1882）が³

“I hope his book is finished, … It is certainly one of his most beautiful works, if not the most beautiful of all. It would be too sad to think the pen had fallen from his hand, and left it incomplete.”⁽¹⁾

と言葉を残したように、ディケンズの死を嘆くだけではなく、彼の死によって未完となった作品『エドウィン・ドルードの謎』（*The Mystery of Edwin Drood*, 1870）が解決されぬまま永遠の謎となったことも、人々を大いに悲しませた。

物語はロンドンのスラム街にあるアヘン窟での怪しげな幻想から始まり、未来が決して訪れない過去に取り残されたかのように沈滞した陰鬱な町、クロイスタラムへと舞台を移す。ここで現実の生活に幻滅し、聖職者でありながら冒頭でアヘンにふけていたジャスパー（John Jasper）と、輝く未来が保証されているのに自ら棒に振ろうとしている、ジャ

スパーが後見している甥エドウィン (Edwin Drood) の会話から、それまでの二人の良好な関係に違和感が生じていることを示唆する。さらにエドウィンと幼い頃から婚約していたローザ (Rosa Bud) の不仲もほのめかされた後、セイロンから来た新たな住民ランドレス兄妹 (Neville & Helena Landless) との複雑な関係が描かれる。クリスマス・イヴにエドウィンが行方不明となり、甥を溺愛しているジャスパーがネヴィルに嫌疑をかけ執拗に追い回す。同時に、ジャスパーは秘めていた邪恋をローザに打ち明け、怯えたローザはロンドンにいる彼女の後見人の元へ逃げる。その後、不可思議な人物ダチェリー (Mr. Datchery) がクロイスタラムに現れ、ジャスパーの周辺を探り始める。

予定されていた12分冊中6分冊目を終えた⁽²⁾時点で、作者の死によってタイトル通り謎の結末となった。そのため文豪ディケンズが描けなかった物語後半に対する、様々な推測が議論されてきた。ここでは前半のストーリーや作者の残した手がかりを基に、作品の謎を解説してみたい。

I 最初の謎

1. ジャスパーの人物像

独特のキャラクター設定や、当時の腐敗した政治を風刺する作風で有名なディケンズは、初期作品において善悪を完全分離し、勧善懲悪のパターンで人気を博した。作家としての名声を得た反面、離婚という個人的な暗い事情から人物設定に変化が訪れ、『二都物語』(*A Tale of Two Cities*, 1859) においてはシドニー・カートン (Sydney Carton) という人生に挫折し、内面に影を潜ませた人物を描き始める。未来を見失った人間が、心の中で相反する感情を成長させ、その心理を深く追及しながらストーリーを展開させるようになった。

前作から5年もの十分な準備期間において発表された、この作品の主要人物であるジャスパーの人物設定は、様々な批評家たちが

Dickens was not interested simply in the machinations of crime and detection; his was to be a crime based upon the experience of violent and thwarted love, and it was tone explored through the consciousness of the murderer himself, John Jasper. . . the real theme of the novel lies not in its complicated plot but rather in Dickens's wonderful observation of character, and his strange insight into the tragic secrets of the human heart.⁽³⁾

He (=Dickens) is to explore the deep entanglement and conflict of the bad and the good in one man.⁽⁴⁾

と指摘するように、それまでにない複雑な内面を有する人物に仕上げられる予定だった。一人の人間が善と悪の両面を有し、深い対立に苦しむ姿を描く。緻密に構成されたプロットの中で、人間の内部に潜んだ心理を追及することに重点が置かれる。円熟したディケンズの技巧を集大成した作品として、また人物設定において新しい一面をうかがえるものとして、この作品は大きな意義を持つはずであったと考えられる。

冒頭部分、アヘン窟にいるジャスパーは、抜け出すことのできない彼の現実世界を象徴する大聖堂と、目の前に見えるアヘン窟の壊れたベッドの鉄柵が、朦朧とした意識の中で交錯し、さらにサルタンの行列の幻想を見る。大聖堂は古い厳格な英国教会で聖職者として過ごす外面、ベッドの鉄柵とサルタンの行進は異国のイメージと囚われた現実社会からの逃避を夢見る内面の象徴となる。このようなジャスパーの二面性は、ダイソン (A.E. Dyson) が

The 'split' in him (=Jasper) is not between two personalities, but between two deliberate personae – the respectable public self of Cloisterham and the exotic private self of the Limehouse den. At all times in his 'normal' life Jasper commands both personae.⁽⁵⁾

と指摘するように、2つの人格というよりむしろ2つのペルソナを有していると言える。聖職者としてのペルソナとアヘン窟でのペルソナは、幻想の中で大聖堂とサルタンの行進が共存するように、彼の心の中に常に同時に存在している。故に彼の2つの顔は、ローザが通う女子学院のトゥインクルトン女史 (Miss Twinkleton) が、教師としての昼の顔と私的な時間を楽しむ夜の顔を使い分けているのとは違う。彼女は昼間に教師をしている時は夜の顔を忘れ、夜には昼の顔を忘れている。“two states of consciousness”(p.53.)⁽⁶⁾ という全く別の状態にあり、2つの顔は混在することなく、それぞれが中断され独立の過程をたどって持続している。一方ジャスパーは常に2つの面を保持する。内面に対照的なペルソナが潜んでいることを意識しながら、その状況に応じて的確なペルソナを外面に表す。二重生活に苦しんでいることが最初から暗示される。

その後、彼は近くにいる中国人や老婆の顔を覗き込んで “Unintelligible”(p.39.) と叫び始める。自分がどこにいるか分からない、現実存在するものとアヘンによる幻想か区別

がつかない、自分自身の存在意義が見出せない、自己の深層心理が理解できない、そして外見からは人の内面を判断できないことを表し、ジャスパーが多くの謎を抱えていると示唆する。この段階で彼の職業や身分は明かされておらず、ただのアヘン吸飲者である。しかし同じ日の午後、幻ではないクロイスタラムの大聖堂に“a jaded traveler”(p.39.)が入っていく。この男は次章になって初めてジャスパーであり、町の聖歌隊長として門番小屋に住み続けていると分かる。“traveler”として紹介されるのは、ロンドンから帰ってきた点を強調しているのかもしれないが、彼がこの町にとって異質な存在、もしくは彼にとってこの町での地位や生活が仮の姿であることを印象づける。汚れた白衣を急いでまとい、聖歌隊と共に“Again, when the wicked man turneth away from his wickedness that he hath committed and doeth that which is lawful and right, he shall save his soul alive.”(Ezekiel, 18:27)を歌うことは、アヘン吸飲で現実逃避するジャスパーでさえも、聖職者としての職務を果たすことで生き永らえる日々を、朝夕の礼拝で確認していると考えられる。

だがアヘンの影がジャスパーに落ちることは、エドウィンをはじめ聖堂用務員トープ(Tope)や小参事会員クリスパークル(Mr. Crisparkle)にまで目撃される。ジャスパーの異質な言動は、聖歌隊の合唱を外で聞いていたエドウィンとローザが、他の聖歌隊員と調和できないジャスパーの声を聞き取ることで強調される。清らかな聖歌隊の声に混ざらない、現実世界になじめないジャスパーの苦悩は日々積み重なり、作品後半に向け徐々に露呈していく。

2. エドウィン殺しの真偽と犯人

主人公であるエドウィンはアヘン窟にいた老婆パッパ王女(the Princess Puffer)と14章で言葉を交わしてから行方不明となり、16章で彼の金時計とシャツピンがネヴィルと訪れた川の堰で発見された以外、何の痕跡も残さず姿を消す。作者の創作ノートに17もの表題候補があり“The loss of Edwin Brude”“The Flight of Edwyn Drood”“Edwin Drood in Hiding”“The Disappearance of Edwin Drood”“Dead or Alive”など「失踪」「逃亡」「潜伏」「生か死か」という語が使用されていることから、一時的に姿を隠しているだけとの見解もある。最終的に「謎」に決定したことで、生死両方の可能性を残す。エドウィンの生死論争そのものが作品において重要であり、彼の不在は主題である謎を深める。そしてエドウィンが所持するローザに渡す予定だった婚約指輪は、彼と共に消え、生と死をつなぐ象徴的物品となる。指輪は死者(エドウィンとローザの父)が望んだ、二人の幸せな結婚ではなく、努力せずに手に入るはずの未来を実現させなかった若者、生者エドウィンが

所持し、結末で死者となったエドウィンの身元と、生者としての存在意義を持てないジャスパーが犯人であることを証明したのであろう。

この展開は作者自身が周囲の人々に何度か漏らしている。

Charles Dickens Junior recalled a last walk with his father near Gad's Hill, when he asked him, "Of course, Edwin was murdered?"

Whereupon he turned upon me (=Junior) with an expression of astonishment at my having asked such an unnecessary question, and said, "of course; what else do you suppose?"⁽⁷⁾

また同時代の推理作家ウィルキー・コリンズ (Wilkie Collins) の弟であり、次女ケート (Kate Dickens) と結婚したチャールズ (Charles Alston Collins) も1871年5月付の手紙で "Edwin Drood was never to reappear, he having been murdered by Jasper."⁽⁸⁾と記している。さらに1905年10月の *The Times* が掲載した記事に、挿絵画家ファイルズ (Luke Fildes) は作者がジャスパーによるエドウィン殺害を意図していたと聞かされていたことが明示される。

He (=Fildes) reported a conversation with Dickens, in which he had asked the importance of Jasper's double necktie (in fact, a black scarf in the novel). Dickens replied, "Can you keep a secret? I must have the double necktie. It is necessary for Jasper strangles Edwin Drood with it."⁽⁹⁾

ストーリーにおける指輪の重要性も、作家は親友フォスタ (John Forster) に作品の構想を話す際に触れている。

The story, I (=Forster) learnt immediately afterward, was to be that of the murder of a nephew by his uncle; the originality of which was to consist in the review of the murderer's career by himself at the close, when its temptations were to be dwelt upon as if, not he the culprit, but some other man, were the tempted. The last chapters were to be written in the condemned cell, to which his wickedness, all elaborately elicited from him as if told of another, had brought him. Discovery by the murderer of the utter needlessness of the murder for its object, was to follow

hard upon commission of the deed; but all discovery of the murderer was to be baffled till towards the close, when, by means of a gold ring which had resisted the corrosive effects of the lime into which he had thrown the body, not only the person murdered was to be identified but the locality of the crime and the man who committed it.⁽¹⁰⁾

つまり、変化のない単調な日常に疲れていたジャスパーが、希望に満ち溢れた未来を約束されている甥エドウィンを殺害する。生石灰で遺体を溶かしても⁽¹¹⁾、金の指輪だけが溶けずに犯罪を証明し犯人の告白を導く。クライマックスに予定されていたであろうジャスパーの独白は、ディケンズの作家としての集大成であり、作家本人の告白になったかもしれない。

ではストーリーの大筋が見えたところで、作品内に残る謎を次章で追及したい。

Ⅱ 新たな謎

1. 謎の人物ダチェリー (Mr. Datchery)

ダチェリーとは何者か。この人物はクロイスタラムに現れ、エドウィン事件に強い関心を見せ、ジャスパーを監視するようにトープ夫妻の家に下宿を始める。事件の謎を解く探偵役であり、彼の正体を明らかにすることで、事件の解決が進んでいくように思われる。

まず考えられるのは、ダチェリーがその時点までに姿を現していない新しい登場人物で、事件に不信を抱く刑事もしくは私立探偵である。しかしダチェリーの白髪がひどく大きいこと、町長のサブシー氏 (Mr. Sapsea) との会話中に、帽子を手に行っているのを忘れて帽子を取ろうとすることから、かつらをかぶり変装していると考えられる。つまり新しい人物ではなく、既に登場している人物の変装が疑われる。ダチェリーと同時に現れた人物は、変装して現れることが困難なので、直接対峙したことの無いエドウィン、ローザの後見人グルージャス (Mr. Grewgious)、彼の書記バザード (Bazzard)、ネヴィルとヘレナ・ランドレス兄妹、ロンドンに身を隠したネヴィルの隣人である退役海軍士官ターター (Tartar) に限られる。ここで一人一人検証してみたい。

エドウィンがダチェリーに変装するには、彼が死んでいないのが前提となる。だが様々な証言もあり考えづらい。もしエドウィンが生きているならば、生きていることに気付かれず、自分を溺愛していたはずの叔父に殺されそうになった動機を探りたいであろう。しかしいくら変装したとしても、ジャスパーに気付かれないとは考えにくい。またダチェリー

がアヘン窟の老婆パッパ王女と出会った場面で、

“I’ll be honest with you beforehand, as well as after. It’s opium.”

Mr. Datchery, with a sudden change of countenance, gives her a sudden look. . . . “It was last Christmas Eve, just after dark, the once that I was here afore, when the young gentleman gave me the three and six.”

Mr. Datchery stops in his counting, finds he has counted wrong, shakes his money together, and begins again.

“And the young gentleman’s name,” she adds, “was Edwin.”

Mr. Datchery drops some money, stoops to pick it up, reddens with the exertion as he asks: “How do you know the young gentleman’s name?” (p.275.)

とあるように、ジャスパーがアヘンを吸飲していた事実に驚きを見せた。エドウィンは姿を消す前にジャスパー本人からアヘン服用を知らされていたので、突然顔色を変え驚くはずがない。ゆっくりとコインを数え直す仕草も、彼女の話に興味を持ち、聞き出す時間を作るためと考えられる。ただエドウィンであれば更に細かい点まで追求していくのではないだろうか。以前に会った時“Ned”というジャスパーしか使わないエドウィンの愛称を何故知っていたのかなど、知りたいことはもっとあるはずだ。やはりエドウィンは殺され、その犯人を捜すためにダチェリーが登場したと考えるのが妥当に思われる。

次にローザの後見人であり、彼女の母親にかつて恋心を抱いたグルージャスはどうか。ジャスパーの邪恋からローザを救うため、またジャスパーを探りエドウィン殺害犯として断定するため、ダチェリーに変装することはあり得る。エドウィンが指輪を持っていることを知る数少ない人物であり、二人の婚約破棄を知らされたジャスパーの異様な態度を目撃した唯一の人物である。だが彼はローザとの会話からかなり話下手であると分かる。ダチェリーのように優雅に振る舞い、饒舌に人々から話を聞き出すことができるのか疑問が残る。さらに彼はロンドンにいるローザを保護しなければいけないので、クロイスタラムに滞在する時間的余裕はない。変装して探り出す理由はあるが、人物像として難しい。

ランドレス兄妹、特に兄のネヴィルはエドウィン殺害の嫌疑をかけられているため、潔白を証明するためにジャスパーを探る可能性はある。ただ事件以降、他人から冷たい視線を受け、身を隠しているロンドンにおいても、夜の闇に乗りなければ外出できないほど意気消沈している彼が、変装しているとはいえクロイスタラムに行き、自分を疑うジャスパー

の前に堂々と現れることができるのか。変装に気付かれた場合、嫌疑が高まる可能性があり、危険ではないのか。一方、妹のヘレナに関してはかなり強い支持がある。ヘレナ＝ダチェリー説を初めて唱えたウォルターズ (J. Cuming Walters) は、ヘレナには兄の潔白を証明し、友人であるローザをジャスパーから守るためにも、変装してジャスパーに近づく理由があり、ジャスパーの不思議な力に屈することのない強い性格の持ち主であると論じる。またリンゼイ (Jack Lindsay) は、当時ディケンズが絶賛したコリンズの『無名』 (*No Name*, 1862) に男装したヒロインが現れたり、愛人である舞台女優エレン (Ellen Lawless Ternan) の影響から、女性の男装に高い関心を示していたことを指摘する。このようにヘレナ＝ダチェリー説に強い支持があるものの、同時に反論も存在する。居酒屋がツケを書き留めるチョークの印を、若い女性であるヘレナは知っているだろうか。お金をゆっくりと数える手をジッとみつめていたパッパ王女は、女性の手気付くことはなかったのか。双子の兄と入れ替わって遊んでいた幼児期があったにせよ、長期に渡って男装を続けるのはかなりの負担とならないだろうか。そしてダチェリーが初めてクロイスタラムに現れた場面で、ホテルの給仕に長期滞在できる下宿を尋ねトープ家を紹介されるが、途中で道に迷いデピュティ (Deputy) という少年に案内してもらう。この町に不案内であることを印象づけるなら、ホテルの給仕に教わるだけで十分である。デピュティがジャスパーの家を指さした時にトープ家と間違わずもない。つまりクロイスタラムの住人、もしくは訪れたことのある人がダチェリーである可能性は低く、これまで挙げた人物も否定できる。

クロイスタラムを初めて訪れるターターはどうであろうか。ダチェリーとターターが自らの名前を明かす場面を比較してみる。

“Take my hat down for a moment from that peg, will you? No, I don’t want it; look into it. What do you see written there?”

The waiter read: “Datchery.”

“Now you know my name,” said the gentleman; (p.217.)

The gentleman came in; apologized, with a frank but modest grace, for not finding Mr. Crisparkle, and smilingly asked the unexpected question: “Who am I?” . . .

“Wait a moment!” cried Mr. Crisparkle, raising his right hand. “Give me another instant! Tartar!” (p.243.)

優雅な振る舞いで、相手に推測させるよう仕向ける独特な口調に、ダチェリーとターターの類似性がみられる⁽¹²⁾。しかしターター登場の時期が早すぎるという意見もある。ダチェリーとターターはほぼ同時期に現れている。更にターターは毎日ネヴィルを訪問するため、ロンドンとクロイスタラムを行き来することになる。ローザをジャスパーの邪心から救い、ネヴィルの潔白を立証するために活躍する役目を果たすと思うが、ダチェリーに変装して謎を探る時間的余裕はない。

最後にグルージャスの書記バザードであるが、彼はダチェリーが出現する時期に休暇をとっており、クロイスタラムに滞在が可能である。その上、自ら悲劇を書くほどの演劇好きのため、変装をして探偵役を演じるのは自然である。性格としてはターターの方がふさわしく思われるが、バザードの人物像はグルージャスやエドウィンが感じたものであり、実際には十分描かれていない。容姿に関してもダチェリーは白髪であるにも関わらず黒眉で違和感があると記されている。ターターは“brown hair”(p.214.)であるが、バザードは“dark-haired personage with black eyebrows”(p.135.)であるため適合する。しかし大きな疑問として、バザードはダチェリーになる根拠がない。変装も演劇好きというだけでは理由が弱い。ここで仮説を立てたい。バザードはグルージャスに秘密で調査をしているとしたら？秘密にする理由は以下のように考えられる。ローザがグルージャスの事務所に逃亡してきた時、彼はバザードが休暇に入っていることと、劇作家としての才能があることを話す。

He (=Bazzard) is very short with me sometimes, and then I (=Mr. Grewgious) feel that he is meditating “This blockhead is my master! A fellow who couldn't write a tragedy on pain of death, and who will never have one dedicated to him with the most complimentary congratulations on the high position he has taken in the eyes of posterity!” (p.240.)

グルージャスは日頃からバザードを場違いな仕事につけていると気にしているので、このようにローザに話したのかもしれない。しかし事前に二人が口論した言葉をそのまま話したとしたら。つまりバザードはグルージャスから直接もしくは偶然に、エドウィンとローザの婚約破棄を知らされた時点でのジャスパーの異常な様子や、金の指輪がエドウィンと共に消えたことを耳にする。バザードは瞬時にエドウィン殺しはジャスパーが怪しいと推測する。グルージャスは彼の推理を一笑し相手にしない。劇作家としてのプライドを傷つけられたバザードは「悲劇を書けない人に、私の推理を理解できない」と言い放ち、自分

の論を立証するため変装してジャスパーを独自調査し始める。この流れは想像に過ぎないが、ダチェリーの正体を考える時、時間的にも状況的にもバザード＝ダチェリー説はかなり有力であると結論づけたい。

追記としてロブソン (W.W. Robson) のダチェリーはディケンズ自身であるという興味深い説⁽¹³⁾を挙げてみたい。ディケンズが幼少時代から好きだった『アラビアン・ナイト』(*Arabian Nights Entertainments*) に登場するハルン・アル・ラシッド王 (Harun-al-Rashid) のように、自分が描いた作品の中で、ダチェリーに扮して事件解決に活躍するという。常に読者を楽しませてきたディケンズが、最後の作品⁽¹⁴⁾で自ら事件解決をして作家としての幕を閉じるというのは趣向に富んでいると言えよう。

2. 表紙絵⁽¹⁵⁾に潜んだ謎

当時ディケンズは表紙絵に作品の構想を盛り込むため、綿密な打ち合わせを挿絵画家と行っていた。表紙絵を読み取れば、作品の全体像がつかめるはずである。当初この絵は娘婿チャールズ・コリンズに依頼されたが、下書きを仕上げた時点で体調が優れないため辞退、後任としてファイルズが受け継いだ。ファイルズの表紙絵はコリンズの下書きとほぼ同じ構成で、作家の意図を十分反映したものになっている。では、この絵は何を意味するのだろうか。先ほども引用したコリンズの手紙に答えが見出せる。

This is indicated in the design, on the right side of the cover, of the figures hurrying up the spiral staircase emblematical of a pursuit. They are led on by Jasper, who head of the title. The female figure at the left of the cover reading the placard "Lost" is only intended to illustrate the doubt entertained by Rosa Bud as to the fate of her lover, Drood. The group beneath it indicates the acceptance of another suitor.⁽¹⁶⁾

詳細に見ていくと、左上の男女は婚約していた頃のエドウィンとローザで、その上にいる花を持った女神が彼らの幸せを祝福している。対照的に右上には、二人の様子に指をくわえて見ているジャスパーと、彼の殺意の芽生えを示す剣を手にする女神が描かれている。中央左はエドウィン失踪のポスターを見るローザの姿、そしてローザに愛を告白するターター。右側は犯人を追うジャスパー、ターター、クリスパークル。ここで一番下に描かれたクリスパークルが大聖堂の階段を駆け上りながら左手でそっとジャスパーを指差すと同時に、下方に注目している。クリスパークルの様子に気付いたジャスパーは彼の注意を引

くために、犯人は上にいると右手で示す。この右手は指をくわえている自分自身の姿を指差している。下段は事件の謎解きをしながらアヘンを吸うパッパ王女と客の中国人（冒頭からパッパ王女と顔立ちが似ているとジャスパーに指摘され、後半で彼女と行動を共に活躍すると推察される）。そして中央にクライマックスとなるであろうジャスパーとエドウィンの再会。ただしエドウィンは生存していたというより、自白を引き出すために変装した人物がいると推測できる。では、このクライマックスを迎えるまでの展開はどうなっていくのか。最後の謎を解きながら、作品後半のストーリーも組み立てていきたい。

Ⅲ 最後の謎

1. 殺害の動機と方法

第1章において、ジャスパーは日頃からエドウィンを厳しい眼差しで見つめていると描かれる。

... a look of intentness and intensity – a look of hungry, exacting, watchful, and yet devoted affection – is always, now and ever afterwards, on the Jasper face whenever the Jasper face is addressed in this direction. (p.44.)

甥を溺愛していると既に記されているが、身内に対する愛情を越え何かの意図があることを暗示する場面である。この後、彼はアヘン吸飲を以前からしているとエドウィンに告白し、単調な生活に対する精神的苦悩を訴える。甥の将来を考え、警告として彼の苦悩を受け止めるよう促すが、エドウィンは全く真剣に考えようとしなない。

“You won’t be warned, then?”

“No, Jack.”

“You can’t be warned, then?”

“No, Jack, ~” (p.50.)

将来の墮落に対する警告だけでなく、自身の悩みを受け止めてくれると思っていた信頼を、愛する甥が気にも留めず瞬時に否定したため、ジャスパーは深く傷付き憎悪を増していく。エドウィンへの反感だけでなく、ローザへの邪恋も加わり、殺人への思いが一気に高まる。この時点でエドウィン殺しの計画が夢想から実践に移行する。だが心に生じた殺意はまだ

漠然としており、実行性に欠ける。この後サブシー家で知り合う墓石の石工ダードルズ (Durdles) が大聖堂の鍵を持っており、彼に殺害と死体遺棄の場所を思いつかせる。ジャスパーはダードルズを利用して次々と準備を始める。作者のメモに12章で “Lay the ground for the manner of the murder, to come out at last.” と記したように、ジャスパーはダードルズを連れ出し夜の地下納骨堂を探検する。それも愚かなサブシーが提案したかのように巧妙に導き、自分の案ではないように思わせる。作者自身も “Surely an unaccountable sort of expedition!” (p.151.) と繰り返し、いかにこの探検が怪しいかを素直に書き記している。ジャスパーが持参した酒 (おそらく睡眠薬が入っており、ジャスパーは飲むふりをする) でダードルズが眠っている間に、サブシー夫人の記念碑の鍵型をとって合鍵を作り、生石灰を地下に隠しておく。帰り道でデピュティをみつけると、今の行動が目撃されていたのではないかと不安になり、少年につかみかかってしまう。この行動が少年に敵意を抱かせ、後にエドウィン殺しの嫌疑がかかるきっかけとなる。殺害・死体遺棄の準備をすると同時に、犯人をネヴィルに仕立て上げる綿密な計画を立てる。ネヴィルはエドウィンの婚約者であるローザに、エドウィンはネヴィルの双子の妹ヘレナに惹かれていたため、最初から折の合わない二人だが、ジャスパーはこの関係をうまく利用する。ローザとヘレナを尼僧院に送った後、口論を始めた二人をなだめて家に連れ帰る。彼らにアヘン入りのワイン (ネヴィルがクリスパークルに酔いが突然回ったことを告げている) を飲ませ、意識が混沌とした中で、不幸な運命を生き抜いてきたネヴィルに、エドウィンがいかに恵まれた生活を送り輝かしい未来が用意されているかを語り、ネヴィルの体内を流れる獰猛な性質に火をつける。ジャスパーの思惑通り二人は取っ組み合いの喧嘩を始め、この騒動を大げさに町中に言いふらすことで、不仲を強く印象付ける。だがクリスパークルに二人を仲直りさせるよう頼まれ、ジャスパーの計画は揺らぐ。

“In a word, Jasper, I want to establish peace between these two young fellows,” A very perplexed expression took hold of Mr. Jasper’s face; a very perplexing expression too, for Mr. Crisparkle could make nothing of it.

... Jasper turned that perplexed face towards the fire. Mr. Crisparkle continuing to observe it, found it even more perplexing than before, inasmuch as it seemed to denote (which could hardly be) some close internal calculation. (p.131.)

困惑の表情は、二人が仲直りすればエドウィン殺害の嫌疑がネヴィルから遠ざかる心配を表す。綿密に立てていた計画が揺らいだため、不安と焦りが表情に浮かぶ。そこで殺害計

画を練り直すため心内で計算を繰り返し、ついに決行する時を迎える。

嵐の静まったクリスマスの朝、エドウィンは行方不明となり、町の人々に甥の心配をする気の毒な叔父の姿を印象づける。さりげなくエドウィンと最後まで一緒にいたのがネヴィルであり、彼がその朝早くに徒歩旅行に出かけたこと（ジャスパーはダードルズと探検した夜、ネヴィルがこの日の朝に旅行へ出かける事を聞きつけ、殺害日程を調整している）を不審に思わせていく。思惑通り人々はネヴィルに不信を抱き、すべての嫌疑を彼にかける。さらにジャスパーは愛する甥のために、なんとしても犯人を突き止めるという決意を日記に書き記し、わざわざクリスパークルに見せる。この時点でジャスパーの計画は終了。エドウィンの遺体は地下納骨堂に隠され、生石灰の作用で骨まで溶け消失。エドウィンは殺害されたかも分からず、謎のまま人々の記憶から薄れていくはずだった。

だがジャスパーの計画は最初から無意味であったことが判明する。グルージャスから二人の婚約破棄を知らされた時、彼の中でエドウィン殺害の理由を失い、己の過ちの大きさに気づき倒れる。後悔というより、計画が崩れたせいで自身に迫りくる危険を察知し衝撃を受けたと言えよう。意識を取り戻してからは急に元気で食欲旺盛となる。殺人事件ではなく、婚約破棄という精神的苦痛によって、エドウィンが自分から一時的に姿を消した失踪事件として片づけようと考えた。しかしその案も変更せざるを得ない。クリスパークルから、ネヴィルがローザに強い思いを抱いていると聞かされ、次のターゲットをネヴィルに定め新たな計画を立てるのだ。今回は自分への嫌疑を逸らすためではなく、ネヴィルを犯人として確定するための証拠も用意する。クリスパークルに催眠術をかけ、エドウィンとネヴィルが最後にいた川の堰に向かわせる。殺害後、隠し持っていたエドウィンのシャッピンと金時計をその場所に置いて、クリスパークルに発見させる。既に大規模な捜索が行われ何もみつからなかったはずなのに、時間が経ってから容易にクリスパークルが発見できたことに対して説明がつく。こうして失踪ではなく、ネヴィルによるエドウィン殺害の疑いは、確信となってクロイスタラム中に広まる。

事件6カ月後、久しぶりにアヘン窟に現れたジャスパーは、今までに幾度となく繰り返された幻想を見る。

“What? I told you so. When it comes to be real at last, it is so short that it seems unreal for the first time. Hark!”

“Yes, deary. I’m listening.”

“Time and place are both at hand.” He is on his feet, speaking in a whisper, and as if in the dark.

"Time, place, and fellow-traveler," she suggests, adopting his tone, and holding him softly by the arm.

"How could the time be at hand unless the fellow-traveler was? Hush! The journey's made. It's over."

"So soon?" (p.271.)

パッパ王女はジャスパーに犯行を自供させようとするが、この言葉だけでは不十分である。彼女がジャスパーに不信を抱き、ただ秘密を知りたかったかもしれないが、クロイスタラムにまで姿を現した理由はまだ語られていない。描かれなかった後半に、彼女の秘密と活躍(真犯人はジャスパーであると証言)する場面が用意されていると思われる。先程のシーンを推理してみると、時間と場所が決まり、連れの旅人(エドウィン)と共に旅をする(大聖堂へ向かう)。スカーフで彼を絞殺し、合鍵でサブシー夫人の記念碑を開ける。死体の中に入れて、事前に地下納骨堂に隠した生石灰をかける。生石灰では溶けない金属類(シャツピンと金時計)を抜き取って隠し持つが、後日クリスパークルに発見させるため堰に捨てる。計画通り順調に終わるが、その日エドウィンが持っていたはずの指輪が見つからないことがきっかけで、ジャスパーを怪しむ人物が出てくる。犯人が殺害後にエドウィンを調べれば指輪もあったはずなのに、シャツピンと金時計しか抜き取らなかったというのは、彼の持ち物を知り尽くしているジャスパーにしかできない。指輪のことを知っているのはグルー・ジャスだけで、前述通りバザードがダチェリーに変装してジャスパーを探っていく。その過程でパッパ王女と出会い、二人が協力してジャスパーを追い詰めクライマックスを迎えるのではないだろうか。

2. ダチェリー(バザード)とパッパ王女の謎解き

未解決の殺害もしくは失踪事件の真相表明、殺害犯として疑われるネヴィルの今後、甥の行方を捜し意気消沈しているジャスパーの怪しげな行動、彼を疑う人々の動き、他にもたくさんのプロットが残されているが、作者がフォスターに告げた物語の構想にもう一度注目して、推理を進めていく。

... the murder of a nephew by his uncle. ... The last chapters were to be written in the condemned cell, to which his wickedness, all elaborately elicited from him as if told of another, had brought him.⁽¹⁷⁾

また本文中にも “. . . the gravestones of the next two people destined to die in Cloisterham” (p.151.)とあるように、作品中で二人（一人目はエドウィン）が死ぬことを暗示している。更にバザードは『不安の茨』“The Thorn of Anxiety”という悲劇を執筆中である。この二つを考慮に入れ、ダチェリー（バザード）とパッパ王女が謎を解くために協力する経緯や二人の関わりを独自に考えてみたい。

ジャスパーが真犯人であると推測したバザードは、グルージャスに気付かれぬようダチェリーに変装してクロイスタラムに赴く。事件の調査をしながら、甥を殺害する動機を探り始める。ジャスパーを追ってロンドンのアヘン窟にもついて行き、様々な変装をして様子を伺う。実はこのアヘン窟には、劇作家としての興味から以前にも変装して（冒頭に現れる中国人）訪れていた。パッパ王女とジャスパーの会話から、甥エドウィンに対する愛情と、相反する彼の輝かしい将来に嫉妬や憎悪を知る。ジャスパーを調べているパッパ王女の動きにも気付き、彼女のことも調べ始める。パッパ王女は幼い頃に両親の元からさらわれセイロンに連れて行かれる。そこで苦労しながらも成長し、双子の子供を産むがすぐに引き離されてしまう。いつか子供たちに会うことを夢見ながらも、墮落した生活から逃れられず、いつしかロンドンに流れついてアヘンで生計を立てる。ある日、客として偶然ジャスパーが現れ、アヘンの幻想からエドウィン殺害計画やネヴィルを犯人に仕立てようとしていることを知る。セイロンから来た双子の兄妹、ネヴィルとヘレナという名前や年齢から、ジャスパーの話す二人が自分の子供たちかもしれないと考え、ジャスパーを追いつくクロイスタラムに現れる。そこでジャスパーを見失ったが、エドウィンと話して“Ned”という名前が不吉であると警告する（この時点で彼女はネッドがエドウィンの愛称であるとは知らず、後に全てが分かる）。ロンドンに戻り、しばらくジャスパーが現れないことを不審に思い気付かれぬよう調べていると、自分と話した青年はジャスパーからネッドと呼ばれており、クリスマス・イヴから行方不明になっていると知る。噂でエドウィンは殺害され、犯人としてネヴィルが疑われているとも聞く。ヘレナとネヴィルを陰から目撃し、自分の子供たちと実感したパッパ王女は、その墮落した現状を子供たちに知られたくないため、二人に自分が母親であると打ち明けられない。だがジャスパーの計画を知っているため、ネヴィルの潔白を証明しようと奔走する。同じくジャスパーを怪しむダチェリーとも手を組み、お互いの情報を交換する。事件を探るため、そして子供たちを心配するが自分では会いに行けないパッパ王女の代わりに、ダチェリーはランドレス兄妹を度々訪れる。殺人犯の疑いをかけられ身を隠す兄と違い、兄の潔白を信じて町の人からの冷たい視線や苦難にも屈することなく立ち向かう美しいヘレナに、いつしかダチェリー（バザード）は心惹かれていく。そして彼女に擁護される兄ネヴィルを羨むようになる。

ある時、以前からお互いの容貌が似ている(冒頭部分でジャスパーも、パッパ王女と客の中国人、この時は作家としての興味から中国人に変装しているバザード、の容貌が似ていることを強調する)ことに気付いていたのだが、パッパ王女の身の上話を聞いて、バザードが生まれる前にさらわれた姉がパッパ王女であると知る。二人は再会を喜び、アヘンを吸飲しながらジャスパーのエドウィン殺害を証明する手立てを考える。ローザへの恋心から溺愛する甥を殺害したジャスパーの心理状態を考察するうち、ヘレナに心を寄せるバザードは甥であるネヴィルを殺害する夢を見ていく。繰り返し同じ夢を見るうちに、バザードは本当にネヴィルを殺害してしまう。アヘンによる幻想だと思い込んだ彼は、いつも通りダチェリーに変装してクロイスタラムに戻る。翌日いつものようにターターがネヴィルを訪れ、彼が絞殺されているのを発見、ジャスパーがエドウィンの復讐に行ったと考え、急いでクロイスタラムに向かう。クリスパークルに事情を話し、二人でジャスパーに詰め寄るが、ジャスパーは全く身に覚えのないことだと否認する。彼らの話を聞きつけたダチェリー(バザード)は、ネヴィル殺しを実行していたと気づき驚き震える。ダチェリーのただならぬ様子を目にした三人は、急に走り出したダチェリーを追い大聖堂の階段を駆け上る。ジャスパーは先頭に立ち、犯人が逃げたと叫ぶ。三人目のクリスパークルは、ネヴィルの死を聞いて駆け付けたパッパ王女に気づき下を見る。(表紙絵中央右の場面)ダチェリーは捕まりネヴィル殺害を自供、エドウィン事件もネヴィルの犯行と考えられ解決する。だがパッパ王女から全てを打ち明けられたクリスパークルは、ジャスパーを疑い始める。同じ頃、ダードルズが地下納骨堂の石壁を叩いて音の違いに気づき、サブシー夫人の記念碑を開けて、生石灰の塊と指輪が出てきたと報告する。またデピュティはジャスパーとダードルズが納骨堂を探検した夜、ジャスパーが大きな荷物を運び入れたことを証言する。生石灰の作用で完全に溶けてしまい、既にエドウィンの遺体は確認できない。ジャスパーの自供を引き出すため、町の人々に協力を要請する。まずグルー・ジャスがさりげなく「あの日エドウィンは指輪をもっていたのに、まだみつからない。きっと遺体と同じ所にあるはずだ。指輪さえみつければ事件は全て解決する」とジャスパーに話しておく。指輪の確認をするため、地下納骨堂に向かったジャスパーは、ヘレナが変装したエドウィンの姿に驚き犯行を自供してしまう。逮捕され牢獄に入ったジャスパーは、感化され同じく甥を殺したバザードに心の内を語る。バザードはジャスパーの話を基に悲劇を書き上げ『エドウィン・ドルードの謎』と表題をつける。

再度、表紙絵を確認したい。表題を囲む茨は彼の作品『不安の茨』を表す。左側のローザ、エドウィンに扮したヘレナ、パッパ王女のそばに、わずかにバラが咲いている。真実を知っても力強く生きていく女性たちの将来を示す。右側は花も葉もなく茨のみである。

犯人を追っているようで実は真犯人のジャスパー、彼に感化されたバザード（中国人に変装）の将来には、茨だらけで何の結果も得られない、将来が望めない状態を暗示している。表題の下にあるスコップと鍵と弁当包みは明らかにダードルズの持ち物で、彼が犯行現場の準備を知らぬ間に手伝い、事件の謎を解く手がかりである指輪を見つけ、事件の始まりと終結に関わる重要な役割を果たすことを表す。

おわりに

最後に、エドウィン・ドルードの「謎」とは一体何であったのか。エドウィン自身はストーリー半ばで姿を消し、二度と作品中に戻ってこない。謎はエドウィンの存在そのものである。生きているのかいないのか、どこにいるのか、彼を見つけ出し、事件の真相を探ることが作品を貫く「謎」となる。当時ディケンズが編集していた雑誌“*All the Year Round*”に掲載されたウィルキー・コリンズの『月長石』(*The Moonstone*, 1868)で、紛失したムーンストーンの搜索が話の中心となる。エドウィンと共に消えた指輪が、彼の居場所を知らせる鍵として同様の働きをする。輝かしい未来を手に入れようとせず、過去に取り残された町クロイスタラムで過ごすエドウィン、現在を見据え、過去の人物たちの遺志ではなく自らの力で未来をつかまえようとするローザは、それぞれの道を歩むことに決める。未来を思い描くことができず、現状から抜け出そうとするジャスパーは、エドウィンを消しローザを追い求める。エドウィンの消失を発端として登場するダチェリーは、ジャスパーを探ることで自分の中に生まれた感情と対峙する。後半は推理小説としてよりも、こういった人間の奥深くに潜む心理を追及する描写がなされ、この内面心理こそが作品の真の「謎」と思われる。

では何故こういった人間の心理を追及していく作品に仕上げようとしていたと考えられるのか。作者がこれを最後の作品と予期していたことを思い出したい。ディケンズ自身が体力の衰えを感じ、この時期に関心を持ったものとは、アンガス・ウィルソン (Angus Wilson) が “... there is a preoccupation with the horror of death – death that is to come irrevocably and consciously to a man in his full vigour.”⁽¹⁸⁾ と述べた通り、迫りくる死の恐怖である。更に

Dickens had extraordinary powers of playing with human speech, human manners and above all human environment, and making works of art out of them. Such a man, whatever his spiritual convictions, must be both fearful of giving up life and

morbidly curious about the feeling of those who have to die.⁽¹⁹⁾

と論じられているように、死に直面した人々の心理を描き出そうとした試みがあつたに違いない。つまり作者の狙いは犯罪を行った者が、自分の罪を贖うために執行される処刑直前の恐怖を導き出すことであり、エドウィン事件はその発端に過ぎない。

ディケンズの前期作品では、サイクス (Bill Sikes) やクイルプ (Quilp) を始めとする悪人たちの最後として、もしくはリトル・ネル (Little Nell) のように悲哀を表現するためとして、死を扱ってきた。このような傾向を増しつつ、『二都物語』ではシドニー・カートンが死ぬことで再生を果たすという、死を契機に新たな可能性を見出すようになる。

次の段階として、死を迎えるだけでなく、積極的に迫りくる死 (処刑) を前に感情を吐露する場面を描くことが、作者の狙いとなってくる。ただ死を語るのは日常生活では特殊な状態なので、ジャスパーにアヘンを吸わせ現実から逃避した次元で死の恐怖を語らせようとした。ミラー (J. Hillis Miller) が

To enter the realm of death is to enter the realm of an immense attraction, and, once there, it is extremely difficult to find strength to return to the daylight world: . . . The only possibility of a relation to death which would sustain life would be some reconciliation of depth and surface. Only someone who could descend into the depths and return to reaffirm in a new form his engagement in the daytime world could put life in a true relation to death.⁽²⁰⁾

と述べているように、ディケンズが直面していた死は、悪人ジャスパーがまるで他人がしたかのように己の罪を告白することにより、ディケンズが感じていた恐怖を登場人物の言葉を通して、自分とは無関係のように語られるものであったかもしれない。このように死と関わることで生への可能性を感じることができるからだ。アクロイドが

. . . the shock of his debility and the first intimations of death seem to have propelled him once more towards expression, towards the writing of a novel which would be dominated by images of death and by the presence of unacknowledged passions running beneath the observable surface of life.⁽²¹⁾

と指摘するように自分の死が近づいているという衝撃が、作者を駆り立てていた。

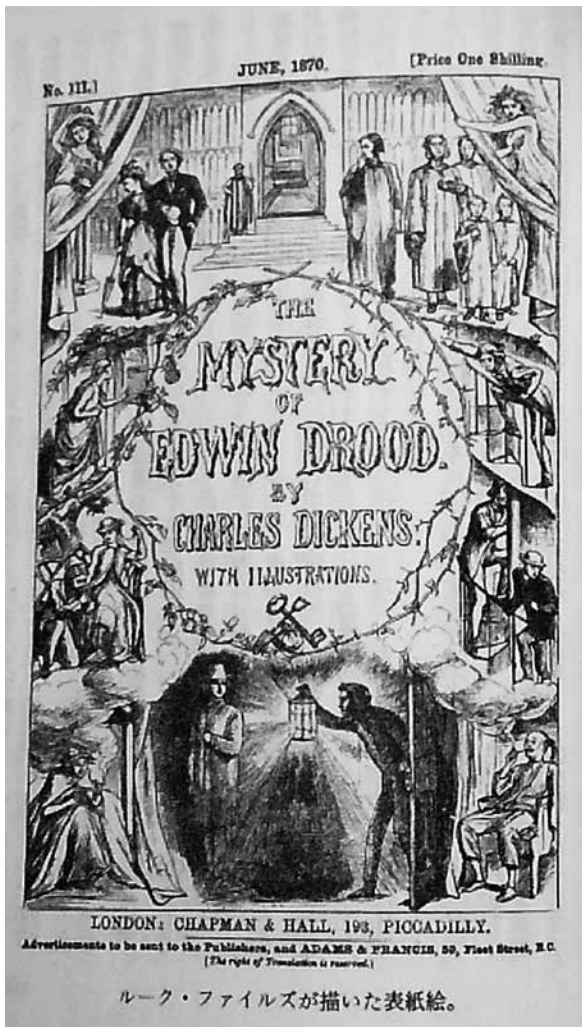
死とは存在が消えることである。エドウィンの不在によりジャスパーが自分の心理を表現したように、ディケンズは自分の死後、彼の残した作品の登場人物たちが、彼の気持ちを代弁してくれることを望みながら作品を描こうとしていたかもしれない。しかしながら、新しい夜明け（22章表題“The Dawn Again”）を迎えると同時に、新たな展開の可能性を残したまま、ダチェリーが扉の上から下まで達するほどの太い線を書き足して、この物語は謎を包み込んで終わりを告げる。

注

- (1) John Forster, *The Life of Charles Dickens* (Everyman's Library, 1969) pp.366-367.
- (2) 『エドウィン・ドルードの謎』はディケンズが編集していた雑誌 *All the Year Round* (1859-1870) に、月間分冊（1分冊4章構成、つまり12分冊48章となる）の形で発行され、12ヶ月で完結することになっていた。
- (3) Peter Ackroyd, *Dickens* (Minerva, 1990) p.1110.
- (4) Edmund Wilson, “Dickens: The Two Scrooges” in *The Wound and the Bow* (University Paperbacks, 1961) pp.88-89.
- (5) A.E. Dyson, *The Inimitable Dickens: A Reading of the Novels* (Macmillan, 1970) p.288.
- (6) テキストは *The Mystery of Edwin Drood* (Penguin Classics, 1985) を使用した。本文中の（ ）内のページ数はこの版による。
- (7) John Beer, “Edwin Drood and the Mystery of Apartness” in *Dickens Studies Annual*, vol.13 (AMS Press, 1984) p.145.
- (8) Charles Alston Collins, “The Mystery of Edwin Drood” in *The Dickensian*, vol.15 (Chapman & Hall, 1919) p.196.
- (9) Charles Dickens, *op.cit.* “Introduction” p.19.
- (10) John Forster, *op.cit.* p.366.
- (11) 当時、生石灰には遺体を骨まで溶かす腐食作用があると考えられていた。実際に生石灰にそのような作用はない。
- (12) Percy T. Carden, “Datchery: The Case for Tartar Re-stated” in *The Dickensian*, vol.15 (Chapman & Hall, 1919) 参照
- (13) W.W. Robson, “*The Mystery of Edwin Drood* : the solution?” in *The Times Literary Supplement* (November 11, 1983) 参照
- (14) 晩年の列車事故や朗読旅行はディケンズの体力を消耗させ、娘に “If, please God, I (=Dickens) live to finish it. . . . I say if, because, you know, my dear child, I have not been strong lately.” Angus

Wilson, *The World of Charles Dickens* (Martin Secker & Warburg, 1970) p.296. と打ち明けていた。

- (15) チャールズ・ディケンズ著 小池滋訳 『エドウィン・ドルードの謎』 p.473.



- (16) Charles Alston Collins, *loc.cit.*

- (17) John Foster, *loc.cit.*

- (18) Angus Wilson, *loc.cit.*

- (19) Angus Wilson, *loc.cit.*

- (20) J. Hillis Miller, *Charles Dickens: The World of His Novels* (Harvard University Press, 1970) p.322.

- (21) Peter Ackroyd, *op.cit.* p.1108.